

## ジェラルド F ダクス、一メソジスト教会、米国（パート3/4）

### 2.3

明: “The Cross and the Crescent (十字架と三日月)” の著者であり学者でもあるダクスの生い立ち、そして彼のハバド「ホリス」神学校での勉学によってキリスト教から目をました逸。パート3: 心理、そして降参への苦心。

目: [事新改宗者ムスリムの逸 者と宗教的 威](#)

より: ジェラルド F ダクス

日 11 Apr 2011

集日 11 Apr 2011

それでもなお、私は 踏しました。更に私は、自分自身がイスラ ムの核心的 を本当は知らず、私が合意している 所は一般的概念に ぎないとしてその 踏を正当化しました。そうして私は み け、更に み返しました。

自分が であるかという自己 は、その人の世界の立ち位置に する力 い肯定です。私の 上 の から、私はたびたび 、アル中、 物乱用などの 々な依存症を治 する 会を与えられました。私は 床医として、基本的な物 依存症はまず断 がなされなければならないことを承知していました。それは治 における 部分です。マ ク トウエインはある こう言いいした: 「 を止めるのは なことだ。私は何百回もそうしている。」その断 を 期に渡って持つ は、患者がそれに する精神的な依存に打ち つことです。そしてそれは患者の基本的な自己 (つまり患者が自分自身を「 者」「酒 み」などと しているかどうか) といった重要な要素に基づいているのです。依存する 性は患者による基本的な自己 として成立してしまいます。こういった自己 を えることが、精神 法の“治 ”において重要なのです。これが治 においての しい部分です。基本的な自己 を えるということは最も しい 作 なのです。人の精神は新しく未知なものよりも、より快 で安全であるように映る、

旧知のものにしがみつくと向があるからです。

上、私には上の知があり、それは日常的なことでした。しかし皮肉にも、私は自分自身、そして自らの宗教的自己を取りす踏にし、それを 用することが出来ずにいました。43年に渡り、いかにそれに付属する多くの格を得ていたとしても、私の宗教的自己はきっちりと「キリスト教徒」としてレッテルがされていたのです。そうした自己のレッテルをはがすことはとても しいことでした。それは私が自分自身をどう定するかを担うものだったからです。今となって考えてみれば、私の踏は私がキリスト教徒でいながらムスリムのような信仰を持つ者として、染みのあるキリスト教の信仰を保つ保のような役目を果たしたことは明なのです。

12月末になり、私と妻は中への旅行をのものとするため、パスポートの申を入していました。その中の事の一つに、宗教がありました。私は全く考えず、れしんだ「キリスト教」と入しました。それは容易であり、れによること、そしてなことでした。

しかしながら、そういったさは、私の妻が宗教に何をいたかねてきたときたちまちに崩しました。私は即座に「キリスト教」と答えて、声に出して笑いました。フロイトによる人の精神における理解についての献の一つは、笑いが精神的の散である合もあるということです。いかにフロイトが性心理理の多くの面においてえていたとしても、彼による笑いについての洞察はそのほとんどが的を得たものだったのです。私は笑いました。私が笑いによって散しなければならなかったこの精神的は一体何だったのでしょうか？

私は早速妻にし、私はキリスト教徒であってムスリムではないことをきっぱり断言しました。それにし妻は、彼女がいていたのはに私が「キリスト教徒」といたのか、または「プロテスタント」あるいは「メソジスト」のどれをいたのか、というものだったのだ、ということを手で教えてくれました。柄、私は人が自分にしてされてもいない言いがかりにし抗弁する必要がないことは知っています。（もしもそれが精神法の最中に、私が怒りというトピックについて切り出したのではないにもわらず、患者がこう言ったとしましょう：「私は怒っていたのではありません。」それは私の患者が

自らの潜在意 に しての言いがかりに して抗弁する必要性を感じていたからなのです。つまり彼は に怒っていたのですが、それを めるか、またはそれに するやり取りをするが出来ていなかったということなのです。) もし私の妻がそのような言いがかり (「あなたはムスリムなのよ」) をしなかったのであれば、彼女以外にはその に私しかいなかったため、それは自らの潜在意 からきたことになるのです。私はこのことを してはいましたが、以前として 踏しました。私の感 に43年 に渡ってこびりついてきた宗教的自己 は、そう には剥がれてくれはしなかったのです。

私の妻による から一ヶ月が ぎようとしていました。1993年の一月末のことです。私は西洋学者らによるイスラ ム 籍を隅から隅まで目を通したため、それらを本棚に しました。二 のクルア ンの英 も本棚に し、三 目のクルア ン英 に取りかかったところでした。この翻 からはこれまでに つけられなかった何かを することを期待しつつ 。

昼休みに、私は 繁に通うようになった地元のアラビアン レストランで昼食をとっていました。私はいつも通り店に入り、小さいテ ブルに着き、 の途中だったクルア ン英 の三 目を取り出して きました。 がつくとマフム ドが注文を取りに私の背 に立っていました。彼は私が んでいたものをちらりと ましたが、何も言いませんでした。注文を ますと、私は一人で に りました。

数分 、ムスリム女性にみられるヒジャ ブ (スカ フ) を被り、慎ましい衣服を身につけた、マフム ドの妻でありアメリカ人ムスリムのイ マ ンが私の注文した食事を んで来ました。彼女は私がクルア ンを んでいることに言及し、私がムスリムかどうかを丁 に ねてきました。私は自分自身をエチケットと礼 で修正するよりも早く「 う! 」と言ってしまったこと から 付きました。その言 は力 く、そして怒りをほのめかすには十分でした。それによって、イ マ ンは礼 正しく私のテ ブルから立ち去りました。

一体何が私に起こっていたのでしょうか? 私は 礼かつ、攻 的な振る舞いをしていました。この女性がそれに する行 をしたというのでしょうか? これは私らしい行 ではありませんでした。私は幼少の から他人に し「サ 」や「マアム」という敬称を使って来ました。私は自分の笑いを の 散として することは出来ましたが、自身によるこのような

非良心的な 度は ごすことが出来ませんでした。私は本を傍らに置き、食事中もずっとこの事に して を揉んでいました。考えれば考える程、私は自分の 度に する罪 感を感じました。食事 にイ マ ンが会 を持って来たとき、 いをしなければならないことは分かっていたいました。 に、 切心がそれを要求したのです。私は彼女による のない に する反抗的 度に して心を乱してしまっていました。 かつ率直な に し、なぜ私はあそこまで攻 的に 反 したのか？ それはなぜ私の 常な 度を引き起こしたのか？

イ マ ンが会 を持って来たとき、私は 回りに 罪しました。「あなたの に して少しぶっきらぼうでした。あなたの が、私の唯一神に する信仰に してのものだったとしたら、私の答えは『はい』です。あなたの が、ムハンマドがその唯一神の 言者の一人かどうか信じるのかというものだったのなら、その答えも『はい』です。」彼女は 切かつ しく 言いました：「 にしていません。ある人々は他の人々よりも がかかるものですから。」

恐らくこれを んでいる 切な 者は、私のメンタル的なアクロバットにあまり く笑うことなく、私が自らいそしんでいた精神的 れ事や振る舞いを していることかと思います。私は独自の方法、独自の言 でイスラ ムにおける信仰宣言であるシャハ ダ（「私は唯一神以外に他の神はなく、ムハンマドは唯一神の使徒である」と言うこと）を唱えたことを承知しています。しかしそう言った 、また自分が言ったことの重要性を しながらも、私は依然として自分の古い宗教的自己 のレッテルにしがみつ়くことが出来たのです。 局、私は自分がムスリムであるとは言わなかったのです。私は にキリスト教徒、いや、神格の三位一体ではなく唯一神の存在を し、その唯一神によって遣わされたムハンマドが 言者の一人であると宣言することの出来る、非一般的キリスト教徒だったのです。もしもあるムスリムが私のことをムスリムであると めるのであれば、それは彼らの自由であり、彼らによる宗教 なのです。しかしながら、それは私によるものではありませんでした。私は、宗教的自己 における危 から脱出する道を したと思っていました。私はイスラ ムの信仰宣言に合意すると慎重に 明し、それを宣言することを わないキリスト教徒だったのです。私によるこじつけ的な 明によって、他者は何でも望み通りのレッテルを私に ることが出来ます。それは彼らによるレッテルであり、私のものではないからです。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/75>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2024 IslamReligion.com. 断 を禁じます。